世界を渡る召喚士

学生ひきニート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を渡る召喚士

【Ｎコード】
Ｎ３０９６Ｚ

【作者名】
学生ひきニート

【あらすじ】
世界を渡る召喚士が物語る。世界の「変化」を求めて。
―――この小説は主人公視点でお送りしています。

新しい物語

「んで，君が今回応募した理由を聞きましょうか？」
「まあ，これでも結構色んなところに行ったことがあるので，そろそろ別のところに行ってもいい機会かなーと思って」
「なるほどね。うん採用。君の適正に合いそうなところに送るからそこから入って」
「ども」

俺は目の前にいる奴にそう言われて，そいつの後ろにある扉の中に入っていった。

扉の中に入り，外に出ると，そこは何も無い平原だった。
後ろを振り向くと，そこには同じ風景が広がっている。扉なんてこの風景に不釣合いなものはない。
成功だ。
話に聞くところによると，かなり確率は低いがたまに失敗することもあるらしいので，一安心だ。

俺は，取り敢えず歩き始めた。

さっきの面接は，……正式名称は知らないが，簡単に言えば，「世界を渡るための面接」だ。
世界を渡るというのは，別に大げさに言っているわけではなく，今

いる世界から別の世界に行くことだ。
各世界には，世界を維持する「均衡」という概念の他に世界を変える「変化」という概念を必要としている。
これはどの世界にでもいる神信深い者からすれば，傲慢と捉えられるかもしれないが，世界というものは人が動かしている。
つまり，この「変化」というものは人によって作られる。
それは，その世界の住人がその世界を変えるのではなく，その世界の常識や定義といったものを根本から覆すような者によって引き起こされるものだ。

俺は俺たちのようなやつらを「渡り人」と呼んでいる。
渡り人の仕事は至極簡単で，自由に行った先の世界で過ごすことだ。
それだけで，世界に大きな変化を生む。
変化はやがて常識や定義となって，世界に浸透し，世界が腐敗しないように働きかけるのだ。

というわけで，俺は新しい世界へと，たった今降り立ったのだ。
ファンタジーな頭の持ち主には羨ましがれるかもしれないが，その世界で生きていくのに必要なものは自分で調達しなければならないし，知識もなく，人脈もなく，雨風をしのぐ家もないのだから，割りと来た当初は苦労する。
俺が担当するような世界は，大抵言語でコミュニケーションを取る文化があるところなので，そういうところでは実は苦労が少ない。
なぜなら，俺には「共通語力」というものがあるので，俺が何を喋ろうと相手にこちらの言葉の意味を伝えることができるからだ。
よって，当面の目的は，「拠点づくり」と「生活力の確保」である。

「召喚せしは，《タンサクソウサ》」

俺がそう唱えると，目の前の風景に歪みが生じ，その中からウニという生物のように種類豊かな望遠鏡をハリの代わりに生やしたものが現れる。

「応えしは，我，《タンサクソウサ》」

『それ』はそう応えて，俺の前に浮かび続ける。

「この付近に人がいそうなところを探してくれ」

「了解した」

《タンサクソウサ》はそのまま上空に浮かび上がり，しばらくゆっくりと宙で回転を続け，その後少しして回転を止めた。

「ここより西方に，主が足で三半刻の場所に人の群れを確認した」

「わかった。ご苦労さん。戻っていいぞ」

「了解した」

そう言って，そのまま《タンサクソウサ》は霧のように消えていった。

俺は言われた通りに西に足を進めた。

さっきのは，俺が持つ唯一の能力である「召喚術」。

まあ詳しい説明は，追々するとして。

俺が渡り人として，やってけるのも，この能力があるからだとも言える。

この物語は，俺が勝手にこの世界で過ごしていく，なんの変哲もない，他愛のない日記のようなものだ。
だから，暇なやつが暇な時に適当に読むことを薦める。

さて，新たな俺の物語を始めよう。

門番

三時間ほど歩いて俺が辿り着いたのは，程々の高さの外壁に覆われた港町であった。
淡い砂色の外壁は，海の青と潮風と陽の光の強さと相性がよく見えた。

俺は港町の門に近づく。
門に近づくに連れて，行き交う人の波が目立ってくる。
俺は港町に入るために，門番を探した。

門番をすぐに見つけた俺は，軽装の鎧を見に纏ったその門番に話しかけた。

「ども」
「ん？　何かようか？」
「この町に入りたいんだけど，いいか？」
「んん？　変なことを聞くやつだな。入りたければお前のその足で入ればいいだろ？」

不思議そうに門番は首を傾げる。

「ああ，そうなのか。悪いね。てっきり許可がいるのかと思って」

俺がそう言うと門番は軽く笑みを見せた。

「ははは！　変なことを言うやつだな。どっかのお国の城下町じゃないんだ。そんなことせんよ」
「そうなのか？　密輸とかするやつだっているだろう？」

「そんなのは勝手にやらせておくよ。第一，後ろ暗いものを運んでいれば，この門にある『解析』の魔法が反応するだろうからな」

ふむ，そんなものがこの世界にはあるのか。

魔法がある世界は2回行ったことがあるけど，常時発動している魔法を見たのは初めてだな。

門番は俺を見て，さらに言葉を続ける。

「むしろお前みたいに，俺に話しかけるようなやつのほうが，怪しいぐらいだよ」

「ああ，それは済まない。まあ悪さはしないから安心してよ」

「はは，どうせどこかの田舎から出てきたのだろ？　俺も暇だったからな。簡単にでいいならこの町のことを教えてやろうか？」

「それは助かるな。是非頼む」

そうして俺は，この世界で初めて会話した門番の男からこの港町のことを教えてもらった。

町の名前は「ゼー」

意味は，町のシンボルにもなっている渡り鳥の鳴き声からとったらしい。

渡り人の俺としては，縁起のいい話だ。

この町の特徴としては，予想通り海産物の輸出が大きな産業となっている。

海産物は「水」と「風」の合成属性である「氷」の魔法がかけられた出荷箱に収められて各地に輸出されている。

町の建物の構成としては，

「町役場」「商館」「海師場」「宿泊施設」「各種ギルド」などが俺が気にすべきものとなる。

「海師場」というのは，俺が一番最初にいた世界の漁業組合とほとんど同じものだ。

「各種ギルド」は，
「戦士ギルド」……モンスター退治などの荒事専門。
「採掘者ギルド」……薬草採取や鉱石採掘専門。
「僧侶ギルド」……この世界の神を信仰し，人々の回復専門。
「魔法ギルド」……魔法研究専門。
「盗賊ギルド」……人に頼めないようなこと専門。

ギルドはこの5つがこの街にはあり，城下町のような大きなところに行くと，さらに他の専門ギルドがあるらしい。
「盗賊ギルド」は禁止している町もあるため，他のギルドに関しては大抵の町と呼べる大きさのところにはあるらしい。

俺は簡単にこれらのことを門番から聞いた後，町に入り，まずは手持ちの異世界のものを換金してから，各ギルドを回ることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3096z/

世界を渡る召喚士

2011年12月11日08時47分発行